



平成24年度研究助成 【音楽振興部門】より

ワイヤー録音によるウイグル古典音楽 ムカームの復元研究——研究紹介

東京藝術大学音楽学部非常勤講師

アブドセミ・アブドラフマン

ムカームとは、中国新疆ウイグル自治区のウイグル人が伝承する、長大な組曲形式の古典音楽であり、ユネスコ世界無形遺産にも登録されています。十二のムカームがあることから「十二（オンシキ）ムカーム」と呼ばれています。現行のムカームは、20世紀前半の民間音楽家、トルディ・アホン（1881-1956）の口頭伝承に基づくとされていますが、1950年代から現在までにレパートリーの縮小や様式の大幅な改変があった可能性が高いと考えられます。一方、トルディ・アホンらによって1950年代に数回の録音が行われたことが知られていますが、最近になり当時のものと推定される録音ワイヤー（テープ以前に短期間用いられた録音方式）全49巻が新疆芸術学院から発見されました。これにより、当時のムカームの様式を録音資料から追跡する可能性が開けました。

これまで筆者は、新疆芸術学院の了承と協力のもと上記の録音ワイヤーのうち数本を日本に借り受け、日本国内で再生する実験を行いました。その結果、実際にムカームが録音されていること、演奏者がトルディ・アホンの同時代者であること、ワイヤーが再生可能な状態で保存されていることが判明しました。

上述の再生実験は、2011年9月および2012年4月に音響技術者の自宅を訪ねて行いまし

た。この時再生されたのは全部で4巻です。（うち1巻は録音されていないことが判明。）使用機材はワイヤー録音機 Webster 80-1（1946年製）、アンプ Muses SRP-200DA、PCM録音機 Sony PCM-D1、PCM-D50です。実験中にワイヤーが断裂するトラブルがありましたが結び直して再開しました。PCM録音されたものはパソコンからwavファイルとしてCD-R4枚に焼きました。再生機の回路あるいは収録当時の電力状況に起因すると思われる、ノイズや音のゆれは多少あったものの、全体としては、予想以上によい音質で、これからの研究に十分に耐え得ると思われました。ピッチや速度についても、オリジナルとそれほど隔たらないかたちで再生できたと考えられます。



Webster 80-1（1946年製）



ワイヤー第一巻（仮①）

2012年7月にPCM録音したワイヤー三巻を確認したところ、その第一巻（仮①とする）に「第六（ウズハル）ムカーム」のダスタン（第二部）の歌と演奏があり、使用された楽器はタンブールとダブと思われます。二つの音声ファイルとなり、合計31分あまりが録音されました。第二巻（仮②）には同じく「第六ムカーム」のダスタン（第二部）およびメシュレブ（第三部）が約10分おさめられ、そのあとに、京劇唱腔（一曲）、二胡独奏（二曲）、琵琶独奏（二曲）が入っていました。曲の冒頭部に中国語のクレジットが入っている場合があります。一つの音声ファイルで、37分あまりでした。第三巻（仮③）には「アジャムムカーム」のムカディマ（序曲）、「ウッシャーウムカーム」のムカディマ、チョンナグマ（第一部）、ダスタン（第二部）、メシュレブ（第三部）、ウイグル語および中国語によるクレジット（女性の声）が入っていました。このメシュレブ（第三部）の再生途中でワイヤーの深刻な巻き込みトラブルが発生し、再生・ファイル化できた部分は32分あまりで、未再生部分のワイヤーはそのまま残っています。

一方、筆者は2012年9月にアモイ（夏門）で、ワイヤー録音の作成者である万桐書氏（90才）に面会してインタビューを行い、関係資料の提供を受けました。万氏によれば、当時のワイヤ



トルディ・アホン（右）、ウルムチ1951

ー録音は二回に分けて行い、第一回目は1951年の録音（新疆芸術学院に保管された全49巻）と1954年に行った第二回目の録音（中央民族研究所に保管）でした。現在出版されているムカームの楽譜集やCDはこの1954年の録音に基づいて、整理されたムカームでした。

1950年8月、当時の新疆の主席であるセイフテン・アジズ（SaypidenAziz）の主張で「ウイグル十二ムカーム」の収集活動が始まりました。1951年に中央文化庁が中央音楽学院から万桐書、劉枳などの音楽専門家を派遣し、民間の音楽家であるトルディ・アホン（1881～1956）をヤルカンドから、ローズイー・タンブール、アブドヴェリ・ジャルーラユフなどをイリからウルムチに招き、2ヶ月間かけて、主にカシュガルやイリ地域で伝承されている「ムカーム」を録音（蓄音機ワイヤー録音）しました。当時、トルディ・アホンは十二組のムカーム組曲を歌ったので、これを「十二ムカーム」と命名



万桐書氏にインタビューを

しました。当時、清朝および国民党政権はウイグル人に対して差別的政策をとったので、ウイグル文化は根底から破壊される宿命にありました。十二ムカームも消滅寸前の危険な状態でした。何故なら、当時のウイグルには、十二ムカームを始めから終わりまで全部歌える音楽家はトルディ・アホン一人以外に誰もいなかったからです。共産党政府が新疆を解放した後に、ウイグルの伝統音楽の保存が開始されました。

トルディ・アホンは、楽譜など見ることもなく、根幹をなす曲調と構成順序に従い、二十四時間、十二のムカームを歌い続けることのできる、まさに「生きた音楽事典」という敬称で呼ばれるにふさわしいムカームの師匠でした。彼と同じように、歌手カスィム・アホン、カルン奏者ローズィー・アカ、タンブール奏者ローズィーら、ムカームを一部伝承していた民衆芸術家達が、トルディ・アホンの体系化に協力しました。

トルディ・アホンの伝承に基づいて整理が行われたので、ウイグルの十二ムカームは元来ヤルカンドの伝統であり、それはすなわちカシュガルとムカームを中心に据えたことを意味します。この事業ではウイグル十二ムカームを極め

て貴重なものと考えていた音楽学者万桐書が尽力し、十二ムカームの曲を、初めて五線譜に採譜しました。歌詞は著名な詩人たちが苦勞して書き取りました。こうした尽力により十二ムカームは、消滅の危機から脱したのです。

この後、八年ほどかけて十二ムカーム録音が採譜され、新疆ウイグル自治区文化庁「十二ムカーム整理工作組」の名義で五線譜にまとめられて出版されました。しかし、60年代以後、中国文化大革命の影響によって、その研究の中断が余儀なくされ、70年代末まではムカーム研究はまったく停滞していました。

今回の万桐書氏へのインタビューで、前述の再生実験の音を氏に聞いて頂いた結果、次のことを確認できました。

1. 演奏者は二人のみで、タンブール（弦楽器）の演奏はローズィー氏が担当、ダブ（太鼓）の演奏はアブドヴェリ・ジャルーラユフ氏が担当した。
2. 歌詞は16世紀の詩人の作詩で、チャガタイ語（ウイグル語の古語）が多く含まれている。
3. ムカームのムケディマとダスタン、メシュレップが歌われており、チョンナグマは欠

落している。

4. 楽器の調弦は曲によって異なる。

2012年11月現在、このインタビューの書き起こし作業と解析を行っています。本研究はこの予備実験の成果を踏まえ、再生可能なすべてのワイヤー録音をデジタル音源化した上で、現行

曲との比較を中心に音楽的分析を施すことで、20世紀前半以前のムカームの様式を復元的に明らかにします。さらに、この音源資料が現地における今後のムカーム継承にいかに関与し得るかを検討するために、ウイグル人演奏家による復元演奏を実施していく予定です。